

令和2年1月31日

石巻専修大学
学長 尾池 守 様

石巻専修大学 自己点検・評価に関する
「外部評価委員会」 委員長 大谷 尚文

石巻専修大学に対する外部評価委員会報告書

石巻専修大学は、平成25年度に公益財団法人大学基準協会の大学評価を受け、基準適合の評価を受けている。令和2年度は、7年ごとに行われる大学基準協会の大学評価実施の年に当たっている。また平成25年度には石巻専修大学独自の外部評価委員会を立ち上げ、令和元年12月16日に開催された今回の外部評価委員会で7回目を数える。その間、石巻専修大学は、平成25年度の大学基準協会による指摘事項、および毎年度開催される外部評価委員会の指摘や意見を真摯に受け止め、PDCAサイクルを軸として真剣に自己点検・評価の作業を繰り返し、大学の改善に努めてきた。このことを本外部評価委員会として高く評価したい。

だが同時に、自己点検・評価を真剣に突き詰めてきたがゆえの限界もかいま見えてきたと言わざるをえない。もっとも、この限界は自己点検・評価の意義を否定するものではない。

以下、令和元年12月16日に開催された外部評価委員会において行われた審議の内容等に基づき、本外部評価委員会としての評価結果をとりまとめたので、それをここに報告したい。

I 総評

ここ十数年の石巻専修大学の最大の懸案は入学定員の確保である。外部評価委員会の各委員から異口同音に述べられたのも、この懸念である。これに対し、尾池守石巻専修大学学長より、最近は「7～8割程度まで回復してきている」という答えがなされている。そのための石巻専修大学の努力は生半可のものではなかったと言えよう。オープンキャンパスを工夫して各学部・各学科・各教員の魅力を来校者に伝え、女子競走部を創設して石巻専修大学の名を外部に知らしめる一方、東日本大震災後の学生寮の建設、通学支援バス網の創始、地元の新聞（とりわけ石巻日日新聞）との関係を深めてコラム等を執筆して大学内部の情報を地元知らしめていることなどは、その努力の一端であるだろう。また、新設の人間学部の人間教育学科は最初の卒業生から毎年、小学校教員免許の取得者を出し続けていることも（本年度は浪人も含めれば5名）、定員回復の一因と言えるだろう。このことの多くは自

己点検・評価という自助努力に含まれ、またその延長上で行われた努力であるだろう。だが尾池学長の言にもかかわらず、定員充足にはまだ2~3割は残っていると云わなければならない。

今回の『平成30年度石巻専修大学 自己点検・評価報告書【抜粋版】』を拝見して、矢口委員からその記述に内的な不整合性が指摘されてはいるが（この不整合性は矢口委員の指示に従って訂正できるだろう）、この自己点検・評価報告書が緻密であり網羅的であるからこそ、逆にその限界をかいま見ることができるのではないだろうか。自己点検・評価報告書が終わるところから外部との関係が始まるのである。尾池学長の残りの2~3割は、この外部との関係に含まれると思われる。繰り返しになるが、この限界は自己点検・評価の意義を否定するものではない。

II 提言

自己点検・自己評価 報告書は大学外部との関係をあぶり出す。

- ① 法人との関係：中長期計画に関して、矢口委員が仙台白百合女子大学の学長ならではの観点で指摘しているように、この石巻専修大学の自助努力たる自己点検・評価報告書からは、法人との関係が抜け落ちていると言わざるをえない。だが法人が大学の改善にこれまで以上にこ入れするならば、創立30周年を迎え、気質・嗜好の大幅に変化した学生にとっていっそうふさわしい快適な福利厚生施設を完備することができるだろう。
- ② 石巻地域圏の少子化との関係：石巻専修大学は石巻地域圏を土台として存立している。ところが、この土台そのものが脆弱化している。定員を満たすことを目的とした経営学部の新学科構想について明石委員は次のように述べている。「これから少子化になり、しっかりと（地元）根を張ったなかで、学生募集を全国的に幅広く行っていく必要がある」。この発言からは、少子化はもはや大学だけの問題ではなく石巻地域圏の問題であることをくみ取ることができる。今後は石巻専修大学が砦＝土台となって石巻地域圏の少子化を食い止める役割が期待されている。石巻専修大学に新しい課題が課させられたと言ってもいいだろう。
- ③ 石巻地域圏の産業との関係：石巻地域圏の基幹産業のひとつは水産業である。だが水産業と石巻専修大学との連携は希薄であるというのが実感である。本学の卒業生で県の水産漁港部の技術主幹を務めている武川委員は、「企業とのマッチングもいたします」とまで発言してくださっている。たとえば武川委員を起点として、今後、石巻地域圏の水産業にたずさわるには石巻専修大学に入るべきだという合意が市民のなかに築かれれば、そのときこそ本学は真に「地域に根ざした大学」と言えるだろう。本学について父母の心の中にしっかりした積極的なイメージが結ばれるのは、そのときである。
- ④ 世界観の拡大：神成委員の発言に従えば、高校生の、言い換えれば若い人たちの「世

界観が非常に狭い」。これはまた石巻専修大学が直面している最大の課題のひとつだと言える。神成委員の正論に従えば、成長期にある若い人たちの知識と理解（世界観）を現代日本が到達した科学・文化・経済の国際性の水準にまで高める手助けをすることこそが高等教育の使命である。武川委員が言及した「開学当初のわくわく感」とは、大学生活を通じて自らの世界観が、現代日本が到達したこれらの水準にまで高まることへの期待感にほかならない。ここで思い出したいのは外部評価委員会前委員長の問題提起である。前委員長が提起したのは、本来、演習科目である語学を他の講義科目と同じく半期2単位と計算することにしたことは正しかったか否かの問題である。前委員長の見解にそのまま与するつもりはないが、大学が担うべき責務のひとつである国際性の観点からも、この制度が発足してすでに卒業生を出しているいま、この問題について全学的な議論の場があっていいと考える。たとえば、人間学部人間文化学科の定員充足率が高いのは、英語以外の語学を選択必修から外したことと関係があるか否かは是非、知りたいところである。

以 上